蔵

K U R A

by Blue X'tal
version 1.0.1

copyright©2009 Blue X'tal

窓が小さいリニアモーターカー。今日は東京へ出張だ。

俺は電車に乗るのが好きだった。「てっちゃん」までは行かなかったが。我が家は比較的旅行に行くことは少なかった。しかし、父方のおじいさんが元気な頃、お盆に帰省することは多かった。

リニアモーターカーの車窓を見ていると、いつのまにか眠ってしまった。

「じいちゃん、あの部屋は何？」

「ああ、あれはな、『蔵』って言うんだ。昔の物がいっぱい入ってるぞ。」

「じいちゃん、見たい見たい！」

「よし、待ってろ、いま鍵を持って来るから。」

じいちゃんが開けてくれた蔵は、夏なのにひんやりしていた。蔵の中にはお米や布団、法事の時の道具などがあった。

「勇樹、じいちゃんはちょっと町まで行って来るからな。見終わったら鍵閉めとけよ。」

そう言ってじいちゃんは出ていった。俺はてっきり宝物が入っているのかと期待していたが、あまりそういう物はなかった。ふと目に留まったのが、時代劇に出て来るような紐で閉じた本だった。俺は第六感のようなものを感じ、じいちゃんには悪いが、何冊か持って出て、鍵を施錠し、2階に上がりカバンに本を入れ、皆の所へ戻った。

それから幾重かの年月が経ち、俺は中学に上がった。だが、すぐに不登校になった。家に引きこもるようになった。買い物に行くこともなく、いや、外に出ること自体ほとんどなくなった。机の上には教科書やら教材が、無造作に山高く積まれていた。

先生がうちに来た。何を話しているか気になって、万年床から這い出るとくらっとして、思わず机にドン、とぶつかって教科書とかが崩れてしまった。そこから古い本がどさっと落ちて来た。

それを見た瞬間、じいちゃんちの蔵から持ち出した本だと分かった。何で此処にあるんだろ？　不思議に思いつつ、ページをめくってみた。大昔、って言ったらじいちゃんに失礼だが、算数の本や国語の本、冒険小説、色々だ。その中に一冊、他の本と違う雰囲気が漂う本を見つけた。

「わが子孫へ」

-2-

幼馴染の遥は俺のことを心配して、時々家に来てくれていた。小さい頃はよく遊んでいて、結婚の約束？　までしていた。小３の頃、２人で電話級（註：現在は４級）のアマチュア無線の免許を取った。簡単だ。「完マル」っていう本を丸暗記すれば取れるのだ。

歩いて２分ぐらいの所に住んでいるのに、無線で良く喋った。嫌いな先生の話や、今日の給食にミルメークが付いてて嬉しかったね、とか、屈託のない会話だった。でも、無線は電話じゃない。大人と会話する時もあった。いつも、小３で免許を取ったことを褒めてくれたりして。

-3-

「わが子孫へ」

『私は文永六年生まれの正志という者だ。私の孫の武史は未来を見ることが出来る能力を持っている。ここに武史の予言を紹介し、それを生きる上での杖にして欲しい。』

本には家系図が幾重にも畳まれ、最後に閉じてあった。ご先祖様の名前が沢山書いてあった。驚くことに、自分の名前まであった！！　俺はほっぺを右手の親指と人差し指で思いっきりつまんでみた。イタタ！　夢ではなかった。

恐る恐る自分の名前のあるページを読んだ。

四六八二一：勇樹

若くして機械の免許状を国家から取得す。情緒不安定な所がある。仲間から大きな愛をもらうも、十八の誕生日に死す。

「な・・・」

　しばらく俺は放心状態になった。学校の先生が部屋に来たらしいが、俺は先生が部屋に来たことの記憶がない。今、13 歳。18 歳の誕生日に死す・・・。

「いやだ、いやだ、いやだ！」

　気がつくと俺は引きこもりのはずなのに、本を持って外へ出て行った。遥のもとへ。

-4-

　遥の家のおばちゃんに挨拶して遥の部屋に行った。

「あ、来てくれたんだ。最近どう？」

　俺は遥に会うなり、涙が止まらなくなった。しばらくその状態が続いた。無言の時が流れた。

　落ち着いて来た所で、俺は本のことを話した。

「すると、自分のご先祖様のこともちゃんと事実と合致してたってことなの？」

　俺は首を縦に振った。刹那、遥は俺にキスしてくれた。ファーストキスじゃないけれど。

「行こう。丸山工業高校へ。電気のこと、いっぱい勉強するの。ロボコン（NHK でよく流れているコンテストの工業高校版）で優勝しよう！　『想い出を沢山作るの！』」

　俺はテーブルをバンッ、と叩いた。ジュースが激しく揺れた。

「どうせ死ぬのにどうして勉強するんだ！？　何も分かっちゃいないじゃないか！！」

「あら、もう帰るの？　勇樹くん。」とおばちゃん。

　俺は遥の家を飛び出した。本は遥の家に置いて来てしまった。

俺はベッドでぐったりしていた。18 歳の誕生日に死ぬ・・・。

俺の中では、「18 歳の誕生日」というフレーズと、遥が言っていた「想い出を沢山作るの！」というフレーズが交互に波のようにやって来ては、引いて行った。

泣き疲れてリビングに行った。TV では外国の余命わずかなタレントの番組をやっていた。そのタレントは、挙式をある放送局の独占放送にして、そのお金で子供達に資産を残す、とナレーションが。

「波瀾万丈のタレントか。でも、独占放送にするなんてよく考えたもんだな。」

CM になった。「想い出を残そう。写真に残そう！　家族や恋人の想い出はトミカラーで！」

「想い出・・・。『想い出』を残そうか？」

遥に電話した。

「さっきはゴメン。前向きに生きていくことにするよ。学校にも行く。」

「そうなの？　よかったぁ！」

次の日から生まれ変わった。今は 13 歳。中 2 の夏。学校の職員室に入ったら、皆が顔をあげて注目した。

「お、勇樹！　よく来たな！」

担任の高橋先生が声をかけてくれた。

「あの、今後のことで相談があるんですが・・・。」

「今、授業ないから空き部屋で聞こう。」

「実は工業高校に行きたいんです。できれば『丸山工業高校』の電子科にしたいんですが。」

「うん、最近の倍率を見ていると 1.13 倍とかだから頑張れば行ける。ただお前、家で何も勉強してないんだろ？　だからそういう意味では険しい。だが、お前次第だ。必要なら補習をやってもいい。他の先生方にも頼んでおくから。」

「ありがとうございます。じゃ、教室に行って来ます。」

それから俺は中 2 の授業を受け、それと並行しながら補習をやっていった。塾には行っていない。遥の家で一緒に勉強している方がいい。遥は頭がいいから。

-6-

「おい、勇樹。この倍率なら行けるかも知れないぞ！」

勇樹は中3に上がり、進路を決める時期にいた。丸山工業高校の電子科の倍率は1.03倍らしい。勇樹は一所懸命に頑張った。もう、「蔵」の本のことなど忘れていた。

-7-

入試というプレッシャーを感じている中、2人は喫茶店に行った。

「今朝、毎朝新聞の占い見てさ。」

「占い？」

「『迷ったら左へ行け』って。その占い、よく当たるんだ。」

「で。左へ行くのね。昔から思っていたけど、『女の腐った奴』みたいに占いなんか信じて。あんなのどうにでも受け取れるじゃない。」

「でも、よく当たるんだよ。それで何回もよかった、って思ってるし。」

「ふん。左に行って、カワイイ子がいたらいいでしょうね。」

遥は不機嫌になった。

「知ってるだろうけど、コンピュータで占いが出来る訳だから、『占いは科学』だ！」

「ふーーん。」

ますます不機嫌になる遥。

「アンタといるの嫌。私、河原電波高専にランクアップしようかな。」

今更、進路を変更することなど出来る訳がないが、遥は勇樹の弱い部分に幻滅を覚えた。

「でも今更・・・。」

「繰り返す。アンタといるの嫌。迷ったら左へドウゾ。アップルティーはワリカンだからね！」

「分かってるよ。」

-8-

勇樹は不満を抱きつつ、商店街から帰ろうとした。途中でＹ字型に道が分かれているが、右には、昔いじめられた畑中がいた。左には、最近ケンカして、それ以来避けている梅田の姿を見た。

「迷ったら左。」

幸い、梅田は携帯ショップに入って行った。しかし。突然車が猛スピードでやって来た。勇樹は車にはねられた。警察の職務質問から逃げた車だった。

-9-

「大丈夫？」

「この通り、足を骨折したけど、入試の時には松葉杖ついて行けるだろうって。」

「私が悪かったんかな。占いが・・・。」

「いや、俺が悪い。自分で判断すべきだった。コンピュータで占いが出来ると言っても、乱数で処理してるだけ。普通の占いと変わらない。出生時のデータ等で数学的結果を出して占うものもあるけど、計算をコンピュータにさせているだけ。もう占いは信じないよ。」

「あ、よかったぁ。」

-10-

「いよいよだね。」

「ああ。」

2 人は丸山工業高校にいた。これから入試だ。

試験の説明を聞く。緊張はピークに達した。入試が始まった。

-11-

入試が終わって、まだ少し肌寒い川の堤防で、2 人は無線をやっていた。廃れゆくこの文化を継承したい気持ちが 2 人の中にはあった。PLC という通信機器があるが、あれは短波放送やアマチュア無線に影響を与える。今のエンジニアは短波放送やアマチュア無線というものの存在を忘れたのだろうか？

「なぁ、『工業』って何なんだろう？」

「え？」

「地球の貴重な資源を沢山使って製品を作る。それらはリサイクルされるものもあるけど、ゴミとして焼かれたり、埋め立てられたりする物もある。ペットボトルもたった1回使っただけでゴミ、もしくは資源ゴミになり、石油製品になる。「リサイクルしましょう」って、言ってるけど、リサイクルするのにもエネルギーがいる。化石燃料は減り続け、地球は汚れて行く。原子力はCO_2を出しませんってCMでやっているけど、ウランを掘って最後に処分をする時までにいくらかのCO_2を出すと言われている。最も問題なのは、『原子力はとても危険』だということ。どうも、原子力関係のニュースを見ていると、ずさんな管理だ。『そこまで』・『病的なぐらいきちんとし過ぎている』というレベルまで安全運転したとしても、チェルノブイリ原発並みの事故はいつかまた起こるだろうと思う。人間だから。」

「某社のCMで『救うのは、太陽だと思う。』ってあるけど、CO_2を減らし、原発の稼働率を下げる為に、太陽電池をすべての家庭、会社、工場に設置したらいいんじゃないかって思うの。そうすれば今の百年に一度の不況打破の突破口になって、それで経済が活性化すると思うの。」

「それからCO_2を出したら、それを打ち消すだけの植林をしている所があるんだ。それもいい方法だと思う。」

「太陽、風力、水力、地熱、波力、バイオマス発電所とか、どんどん作っていって欲しい。」

「あと、物をリサイクルするエネルギーは原則として、クリーン電力を使うべきだと思う。やっぱりクリーン発電所を沢山作るしかないな。今の豊かさを維持するなら。」

-12-

2人とも丸山工業高校に合格した。遥の家でお祝いをした。

「ああ、やっぱ男だらけの世界に行くのは辛いわ。」

「大丈夫。俺が守ってやる。」

「く、臭いセリフ。あんた、体弱いんだから体育会系のクラブ入ったら？」

「うーん、俺は無線部でいいよ。」

「私は写真部にするわ。」

-13-

丸山工業高校での年月は経ち、卒業製作にかかることになった。自分で課題を考えてもよし、ロボコンに挑戦してもよし。俺は遥と孝治と茂一と組んでロボコンに取り組むことにした。

ただ、孝治と茂一はサボってばっかりで、俺と遥がからかわれながら進めて行った。学校に夜の 9 時頃までいたこともあった。俺はハード担当、遥はソフトを担当した。

今回のロボコンのテーマはロボット同士が闘い、相撲の土俵のような範囲から出ると、負け、というものだった。

-14-

予行練習に県立津嘉山工業高校に行った。確かな手応えがあった。

ふと、「蔵」から出て来たあの本、そう、18 歳の誕生日で死ぬっていう本のことを思い出した。俺の誕生日は 11 月 3 日。今 17 歳。そう、ロボコンの日が 11 月 3 日・文化の日だったのだ！　自分でも不思議に思う。あんなに衝撃的な本を見たのに、それをすっかり忘れていたとは！　きっとロボコンのことばっかり考えていたのだろう。

電気棟の実験室で遥に話した。あの本のこと。

「そっか、期限が迫ってるのね。今も家にしまってあるよ。でも今、別に病気や怪我もないんでしょ？」

「うん。体の検査は病院でしてもらったけど、異状なし。もしかしたら会場に行く途中のバスが事故を起こして・・・」

「ここまで来たのよ！　行こうよ！」

俺は黙った。

「最近は観光バスに乗ってもシートベルトの着用が義務付けられているのよ。大丈夫！」

時間は夜の 8 時 40 分。自動車棟の中庭から南に向くと電気棟が見える。その沢山の窓のうち、一つの部屋だけ明かりが灯っていた。半田ゴテの香り漂う教室で俺達は抱き合った。無論、そこまで。

-15-

11 月 3 日・文化の日。試合が始まった。俺達は順調に勝ち進んで行った。ベスト 8 が決定し昼食。

「順調だ。頑張れ！」

　担当の斎藤先生がおにぎりやパンの差し入れを持って来てくれた。頂点を目指し、次の試合に挑んだ。

　そして。決勝戦になった。

「では、ただいまから決勝戦を行います。多田工業高校 VS 丸山工業高校です。」

「緊張するなぁ。」と茂一。皆、同じことが言いたかった。

　今回のロボットは自立型、つまり、マイコンのプログラム通りに動くだけで、操作を行う事が出来ない物である。

「では開始します。ピ・ピ・ピ・ピー」

「あれ？」

「どうも二者動きません。どうしたことでしょう？」

「一旦、中止します。大会規則では、決勝戦で引き分けに出来ませんので、それぞれのチームに整備時間として、10 分与えます。」

　孝治が言った。「これ電池外れてる！」　多田工業高校の方はモータートラブルだったようで、スペアのモーターを大急ぎで取り換えていた。

「10 分経ちました。試合を始めます。ピ・ピ・ピ・ピー」

　相手が攻めて来て、土俵から落ちそうになる。そこは遥のソフトと俺のハードが上手く交わしている。相手側の誰かが言った。

「最終兵器、行け！　パン・パン・パパーン」

　すると、相手のロボットからアームが出てきて、うちのロボットをいとも容易く、土俵の外に出してしまった。どうやら手拍子で命令を読み取る、というシステムのようだ。世の中、上には上がいるものだと愕然とした。

「なんだよ！　あんなの卑怯だ！！」

「でも準優勝やん！」

　こうしてロボコンは終了した。翌日、遥の家に行った。

「ところで、あの本はどうなったんだろう？」

「もう 18 歳の誕生日過ぎてるよ！」

　遥が預かってくれていた、その本を開いてびっくりした。書いてあることが違う！　どこにも 18 歳の誕生日で死ぬと書いてない！！　しかも、文章が大幅に増えている！！　そのまま詳しく読もうとしたら、遥が本を取り上げた。

「歴史が変わったのよ！　未来は決まっているものではなく、自分で変えられるのよ！！」

　俺はどうしようかと思った。ご先祖様がどういう思いでこの本を書かれたか分からない。何故？

　俺はもう深く考えるのを止めることにした。18 歳の誕生日は過ぎたんだから。

−16−

「もう、要らないね。」

　川の河川敷で 2 人はあの本を焼く事にした。

「ちょっと待った。この本はご先祖様が残した大事な本。今度お盆に行って、うまい事言って蔵に戻すよ。」

「それでいいかな？」

「いい。信じるか信じないかは、その人が決めることだ。」

−17−

　ああ、もうすぐ東京だ。こんなにはっきりした夢は久しぶりだな。高校を卒業して、遥は実家の電気店を継ぎ、俺は卒業後、すぐに就職した。某電機メーカーで有機 EL ディスプレイに関係する仕事をしている。

　ふと、遥の声が聞こえた。

「かにそぼろ弁当いかがですかぁ。」

「かにそぼろ？　あ、車内販売の女性か。」

　窓の向こうに有機 EL の光のような虹が見えた。

完